

## くまにち 論壇



慶応大大学院教授

### 蟹江 憲史

かにえ・のりちか 専門は国際関係論、地球システムガバナンス。著書に「SDGs (持続可能な開発目標)」など。52歳。

コロナ禍が世界を覆って2年余。当初は国内で、昨年8月以降は海外から目を凝らしていると、先進国を中心とする他国と比べ、日本の対応の遅れが際立っていることがはっきりと見えてきた。なぜなのか。その理由をずっと考えてきた。

猛威を振るうオミクロン株への対応を通して、それがようやく分かってきた気がする。要するに東日本大震災の際に明らかとなった原発事故の原因と、同じところに理由があるのではないかと。つまり、災害に対して「起こる」と想定して備える他国と、「起こらない」ことを前提とする国の違いなのではないか。

オミクロン株が米国で急速に広がったのは昨年12月中旬ごろ。それから日本で感染が急拡大するまで約1カ月はあった。南アフリカで初確認された時点とは、それ以上の時間差だ。日本政府には状況を分析し、対策を練る時間が十分にあったはずである。その間に何をやっていったのか、今の対応の鈍さを見ると怒りさえこみあげてくる。

日本にある私の研究室のスタッフや卒業生などからも最近、感染の連絡が入るようになってきた。ここまです身近に迫ってきたのは初めてだ。そして、そうした仲間から聞こえて

## 「起こる」を前提に備えを

くるのは、検査体制の不備や、ワクチンの3回目接種をめぐる対応の遅れを指摘する声ばかりである。

新たに出現したオミクロン株の実態を理解するには、症例や研究の蓄積が必要だ。ただ、その結果を待つまでもなく、手に入る情報をもとに打てる対応を考えることが何より重要である。それは、これまで2年間の経験からも分かっているはずだ。

オミクロン株については、これまで得られた情報を見る限り、感染力が相当強い一方で、重症化率は低い。重症化しにくい原因はまだはっきりしておらず、若い人の感染が多いからかもしれないし、ワクチン接種が進んでいるからかもしれないし、オミクロン株自体の性質なのかもしれない。しかし、不明な点があるからといって対策が打てないわけではない。

やがてオミクロン株が日本にもやってくる。対策を進めながら社会活動も維持するという前提に立てば、少なくとも検査キットの生産・配布を加速することはできたはずだ。感染の波が早く到来した米国でさえ、既に1月中旬には検査キットの無料配布が始まっている。

また、ワクチンの3回目接種を促進するための時間もあつたはずであ

る。80代の母は2回目接種を私より2カ月近く前に終えていたが、3回目は母が日本で接種するよりも、渡米した私の方が早くできた。いかにも日本の遅れを感じた。

日本で現実に注力されていたのは、オミクロン株を「入れない」とばかりであった。多くの先進国では、オミクロン株を持ち込ませない措置は時間稼ぎにすぎず、国内で広がってからは再び国境は開かれていた。つまり、封じ込めはもはやできないと腹をくくり、いかにして重症化率が低くなったコロナと共生していくか、ということにモードを変更しているのである。そのためには検査とワクチンがカギを握る。

福島第1原発事故の後、大津波や事故を想定した対処や避難計画があまりにお粗末だったことが反省点として挙げられた。「津波は来ない」「事故は起きない」という建前にこだわらずきた結果が、あれほどまでの大きな被害につながった。その猛省が日本にはあつたはずだが、コロナ対策を見ると、全くその反省が生かされていないように感じる。

災害は起きないのではない。起きることを想定し、いかに効果的に対応するかということこそが、持続可能な物事を進める上で大事になる。それは、持続可能に進める上で最重要となる考え方の一つ「レジリエンス」(回復力)を実現するということである。

コロナと共に進まざるを得ない「ウィズコロナ」がこの先も続くことをくくり、いかにその中で対策を続けていくか。つまり、災害は起きるといつ前提で、いかに災害に強くしていくか。今こそ災害大国の経験を生かすべき時だと思つ。

### 新型コロナ